Hitotsubashi University

Global COE Hi-Stat Discussion Paper Series 272

Research Unit for Statistical and Empirical Analysis in Social Sciences (Hi-Stat)

空間編成からみたアンマン都市社会：2008年アンマン世帯調査報告

加藤博
臼杵悠
岩崎えり奈

January 2013

Hi-Stat Discussion Paper

Hi-Stat
Institute of Economic Research
Hitotsubashi University
2-1 Naka, Kunitatchi Tokyo, 186-8601 Japan
http://gcoe.ier.hit-u.ac.jp

空間編成からみたアンマン都市社会：2008 年アンマン世帯調査報告[1]

加藤博[*]　臼杵悠[†]　岩崎えり奈[‡]

要約：ヨルダンの首都アンマンは総人口の約 4 割を占める。アラブ世界は基本的に都市社会であり、首都は突出した存在である。首都は国や社会の縮図であり、アラブ諸国の首都は共通した社会問題を抱えている。アンマンはかかる意味での典型的なアラブ国の首都であるが、その突出性にはほかのアラブ国の首都とは異なった特徴がある。それは、1946 年の建国（独立）以来、国内におけるマイグレーションのほか、中東和平の紆余曲折の只中にあって、戦争や紛争のたびに外から難民、移民が流れ込むことになったことである。そのため、国家のかじ取りには、まことに厳しいものがあるが、国内外の厳しい状況下にありながらも、ヨルダンの経済は近年において発展をみており、首都アンマンも急速に市街を拡大している。しかし、アンマンの都市社会についての統計データに基づく実証研究はほとんどない。あったとしても、アンマン全体についてのものであり、アンマンの都市社会内部に踏み込んだ研究はない。そこで、本ディスカッション・ペーパーでは、2008 年に独自に実施した世帯調査のデータに依拠して、これまでの特異な歴史を反映したアンマンの発展を跡づけ、これからも変動著しいであろうアンマンの将来をフォローする起点として、アンマンの社会経済状況に関する基礎的な情報を提供する。その際、分析単位を「地区」(liwā')に設定し、アンマン都市社会をその空間編成と内部構造の変化を通して明らかにする。内外のマイグレーションに基づくアンマンの歴史的な発展の特徴は、「地区」の構成と構造に色濃く反映されていると思われるからである。データの分析の結果、アンマンの「地区」がいくつかの範疇に分類できることが明らかとなった。

キーワード：ヨルダン　世帯調査　都市発展　移民

---

[1]本ペーパーでは、ペーパーの構想において加藤が、データの処理において岩崎が協力したが、執筆は主として臼杵が行った。

[*] 一橋大学経済学研究科

[†] 一橋大学経済学研究科博士課程

[‡] 共立女子大学文芸学部

1.　問題の所在と依拠するデータ

1-1 問題の所在

ヨルダンは、小国の多いアラブ世界の中でも、とりわけ国家規模の小さな立憲君主制の国家である。面積は約 8.9 万平方キロで、日本の約 4 分の 1。ヨルダン峡谷地域の湿潤な地域を除けば、高原地帯と内陸部の砂漠地域（国土の 80%）である。人口は約 590 万（2010 年世銀）。そのうち、首都アンマンが約 200 万、近郊を含む大アンマンは 220 万を越える。

つまり、アンマンの人口はヨルダンの総人口の約 4 割にも及び、ヨルダン社会において、突出した存在である。それは、ヨルダンの社会インフラがアンマン周辺に集中していることからもわかる。後述されるように、第一次世界大戦時にヒジャーズ鉄道[2]が破壊されて以降の現代ヨルダンの交通はもっぱら道路によってなされている（後のヨルダン行政地図を参照）。

ヨルダンは 1946 年の建国（独立）以来、イスラエル、パレスチナ暫定自治区、サウジアラビア、イラク、シリアに囲まれているため、中東和平の紆余曲折の只中にあって、国際政治の変化にもろにさらされる立場にある。その結果、戦争や紛争のたびに外から難民、移民が流れ込むことになった。このような事件を挙げれば、ヨルダン建国（1946 年）、エルサレムを含むヨルダン川西岸地区を領土に編入（1950 年）、第二次中東戦争（1956 年）、第三次中東戦争でエルサレムを含むヨルダン川西岸地区を失う（1967 年）、第四次中東戦争（1974 年）、湾岸戦争（1990 年）、イラク戦争（2003 年）、「アラブの春」のなかでのシリア内戦（2012 年）などである。その結果、現在、国民の半数といわれるパレスチナ人のほか、イラクやシリアから多くの難民を抱えることになった。そのため、国家のかじ取りには、まことに厳しいものがある。

しかし、国内外の厳しい状況下にありながらも、ヨルダンの経済は近年において発展をみている。しかし、GDP は約 212 億ドル（2010 年世銀）と小さく、一人あたりのＧＮＰは 3,470 ドル（2010 年世銀）である。

降雨に恵まれたヨルダン峡谷地域では高度な灌漑農耕がおこなわれている。しかし、それを除けば、農耕に適した土地は少ない。リン鉱石、カリ鉱石と天然ガスは産出するが、経済をリードするほどの規模を持たない。石油は周辺の石油産出国に頼っている。政府はリン鉱石やカリ鉱石の輸出、海外からの送金や外国からの支援に頼らない IT や観光などの産業を奨励しているが、現在のところ、主たる産業は商業を中心としたサービス業である。2001 年には、経済成長を期待して、低税金と規制緩和のアカバ経済特区（ASEZA）が設けられた。

本ディスカッション・ペーパーは、こうした近年における経済の活況を支えている首都アンマンでの社会経済生活を世帯調査で得られたミクロ統計に基づいて概観することを目的とする。アンマンは、先に指摘したように、ヨルダンの総人口の約 4 割を占め、ヨルダンにおいて突出した存在である。もっとも、アラブ世界は基本的に都市社会であり、首都が突出した存在であることは、程度の差こそあれ、ヨルダン以外のアラブ国でも共通している。首都は国や社会の縮図であり、アラブ諸国の首都は共通した社会問題を抱えている。アンマンはかかる意味での典型的なアラブ国の首都であるが、その突出性には際立ったものがある。

ところが、これまでのところ、1946 年の建国（イギリスの国際連盟委任統治領より独立）以後の居住空間の拡大があまりに急で、かつその多くが計画性なく展開したためか、アンマンの都市社会についての統計データに基づく実証研究はほとんどない。あったとしても、アンマン全体についてのものであり、アンマンの都市社会内部に踏み込んだ研究はない。

---

[2] ヒジャーズ鉄道は、シリアのダマスカスからサウジアラビアのイスラムの聖地メディナまでの区間を、シリア、ヨルダン、およびアラビア半島西部のヒジャーズ地方を縦断して連絡した鉄道である。総延長は 1,308km、軌間は 1,050mm で、オスマン帝国の鉄道網の一部をなしており、当初の計画では聖地メッカを終着駅にしていた。1900 年に建設が開始され、1908 年に完成した。多くの巡礼者や兵士を南へ運んだが、第一次世界大戦時にイギリスの支援を受けたアラブ勢に破壊され、路線のほとんどは以後再建されることはなかった。

そこで、本ディスカッション・ペーパーにおいて、この欠を補い、これまでの特異な歴史を反映したアンマンの発展を跡づけ、これからも変動著しいであろうアンマンの将来をフォローする起点として、2008 年時点での、アンマンの都市社会の社会経済状況を明らかにしたい。

その際、分析単位を「地区」(liwā')に設定し、アンマン都市社会をその空間編成と内部構造の変化を通して明らかにする。先に指摘したように、アンマンの都市空間の発展は急速であるが、その発展の契機が、一方では、国際政治の戦争や紛争を理由とした外からの外国人移民・難民の流入であり、他方では、首都に職を求めての地方からの国内移住の拡大であり、このアンマンの歴史的な発展の特徴は、「地区」の構成と構造に色濃く反映されていると思われるからである。

1-2 依拠するデータ

依拠するのは、2008 年から 2009 年にかけて実施したアンマン世帯調査のデータである。この調査は、文科省「世界を対象としたニーズ対応型地域研究推進事業」「アジアのなかの中東－経済と法を中心に」（代表：加藤博）におけるプロジェクトの一つとして、一橋大学大学院経済学研究科とヨルダン統計局 (Department of Statistics 通称 DoS)との共同調査としてなされた。その概略を述べれば、次のようなものである。

調査の目的は、都市社会アンマンの社会経済状況を、住民の家族構成、所得・消費水準、教育水準、就業形態、マイグレーションなどの基本指標に基づいて明らかにすることであった。サンプル数はアンマン県の 1,200 世帯であり、2004 年のセンサストラクトをベースに、二段階層化抽出方法により抽出された。調査は個別訪問面接によってなされた。

調査は、ヨルダン統計局が 2008 年度に実施予定であった全国標本家計調査「世帯の所得と消費調査」と連携して実施された。そのことによって、調査経費が節約されるほか、調査サンプルをアンマンだけでなくヨルダン全体のなかに位置づけ比較分析することが可能となるからであった。

調査日程は次のような日程でなされた。（1）2007 年 3 月に調査契約締結。（2）2007 年 4 月～2008 年 12 月に質問票ドラフトの作成とサンプリング。（3）2008 年 11～2009 年 1 月に質問票の最終版作成。（4）2009 年 2 月に調査員トレーニング・プレテスト。（5）2009 年 3～4 月にフィールドワーク。（6）2009 年 5～8 月にデータ入力。

先に指摘したように、調査は、ヨルダン統計局が 2008 年度に実施予定であった全国標本家計調査「世帯の所得と消費調査」と連携して実施された。そのため、所得と消費、貯蓄等に関する情報はこの標本家計調査「世帯の所得と消費調査」（2008 年度）に網羅されているところから、これらの項目については、われわれの質問票では省略された。われわれが独自に設定し、調査をした質問項目は、次の通りである。

1.住宅
2.世帯間の所得移転
3.借金
4.国内移動
5.態度
6.世帯主の親
7.世帯員
(1)基本属性　(2)賃金雇用（主職・副職)
(3)失業　(4)貯蓄（頼母子講）
(5)海外労働移動　(6)（国内）自営業

2. アンマンにおける地区編成

ヨルダンは建国以来、地方行政単位を大きく変更してきた。地方行政のうえで最上位単位である県(Muḥāfaẓa ムハーファザ)を取り上げてみると、1989 年ごろと 1995 年以降の 2 度、区分変更が行われている (北澤 2000)。1989 年ごろの変更では、それまで 5 県(アンマン、イルビド、カラク、バルカ、マアーン)だったのが 8 県(アンマン、ザルカ、イルビド、マフラック、バルカ、カラク、タフィーラ、マアーン)に増え[3]、1995 年以降、さらに区分が変更されて 12 県(アンマン、マダバ、ザルカ、イルビド、アジュルーン、ジェラシュ、マフラック、バルカ、カラク、タフィーラ、マアーン、アカバ)に増えた[4]（図表 1、地図）。

変更の主な内容は、県の数の増加である。これはヨルダンにおける急激な人口増加を示している。実際、ヨルダン内で人口の多い上位 2 県はアンマン県とイルビド県であるが、この 2 県は 2 度の変更においてともに分割の対象となっている。特にアンマン県はヨルダンの中で突出して人口の多い県であり、1985 年ごろにアンマン県からザルカ県が独立し、1995 年以降にはアンマン県からマダバ県が分かれた。このため、1985 年以前のアンマン県と 1995 年以降のアンマン県の面積は異なる。つまり、1985 年以前のアンマン県は、1995 年以降のアンマン県とザルカ県、マダバ県という 3 つの県を合わせたものである。

さらに、アンマン市とザルカ市、マダバ市とは、それぞれ約 20 キロ、30 キロ離れている。この遠く離れた都市を中心とする 3 つの県が 1 つの行政の単位とされていたということは、当時のアンマン市周辺の人口が少なかったことと、その後の急速な人口の増加に伴って、ヨルダン当局が行政単位を人口規模によって機械的に設定してきたことを示しているように思われる[5]。

以上が、ヨルダンにおける地方行政単位の設定における特徴である。次に、アンマン県の人口の推移をみてみよう。ヨルダンでは、人口・家計に関する国勢調査が 2010 年現在までに 1952 年、1961 年、1979 年、1994 年、2004 年の計 5 回行われている。その結果(図表 2)は次の二つに整理できる。

第一は 1952 年から 1979 年にかけて、ヨルダンでの人口に占めるアンマンの割合が突出して高いことである。この期間、ヨルダン内でのアンマンが占める人口の割合が徐々に増加し、1979 年には現在のマダバ県、ザルカ県を含んではいるものの、ヨルダン全人口の 5 割を超えた。

第二は、1994 年から 2004 年にかけてヨルダン全人口に占めるアンマン人口の割合がほぼ一定だということである。1985 年、1994 年、2004 年における現在のアンマン県に相当する人口をみると、それぞれヨルダン全人口の 56.0%、55.7%となっている。このことは、アンマン県の人口は増えているが、同時に他の県の人口も同じ比率で増えていることを示している。

1952 年から 2004 年までの年平均人口増加率[6]の推移(図表 3)を見ると[7]、2004 年に近づくにつれ、県ごとの年平均人口増加率が等しくなっている。つまり、1952 年から 1961 年の期間、年平均人口増加率はアンマンが圧倒的に高かった。しかし、年数がたつにつれ、増加率の差は縮まっており、1994 年から 2004 年にかけてはほぼ同じである。これは、1952 年

---

[3]ヨルダン統計局の発行する統計年鑑を確認すると、1985 年時点ではヨルダンにおける行政区分は 5 県だったが、1987 年時点では 8 県として掲載されている。

[4] この時期に関しても、ヨルダン統計局発行の統計年鑑によれば、行政区分は 1993 年時点では 8 県であったが、1994 年時点では 12 県とされていた。

[5] なぜなら、人口が多いと自治体のサービスが十分に行き渡らず、水や食料不足を引き起こす可能性があるからである。

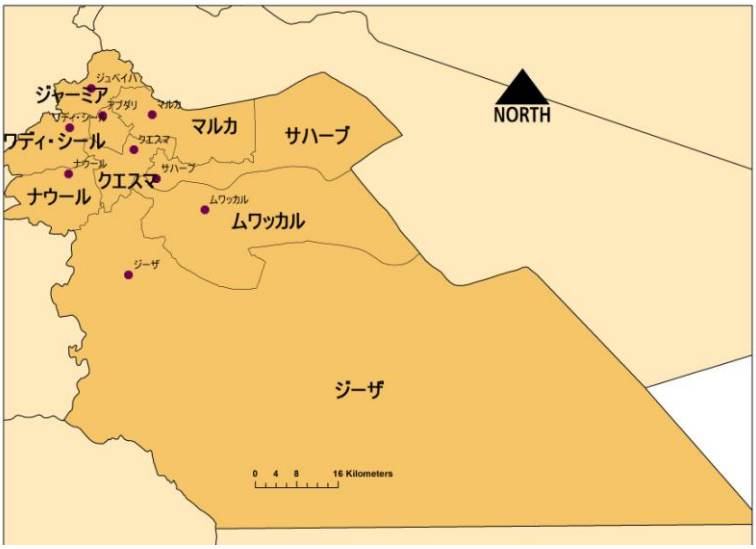
[6] t 年と(t+s)年の平均人口増加率を調べるとすると、年平均人口増加率={(t+s 年の人口/t 年の人口)^(1/s)+1}として計算した。

[7] 前述のようにこの期間、1985 年ごろと 1995 年以降の 2 回にわたって行政区分の分割が行われ、県の数が 5 県から 8 県、12 県と増加しているため、県別に人口増加率を単純に比較することは不可能である。そのため、県の分割を考慮に入れず、1985 年以降についても 1952 年時点における 5 県での行政区分を用いて比較を行った。例えば、1994 年から 2004 年の間でのアンマンの人口増加率について、実際の行政区分はアンマン、マダバ、ザルカの 3 県であるが 3 県合わせてアンマンとし、増加率を算出した。

ごろはアンマンに集中して人口が住んでいたが、1979 年以降から人口がある地域に集中せず、分散して住む傾向にあることを示している。

ところで、これまでにアンマンに流入した人口は、どこに居住したのであろうか。もしそれがわかり、彼らの居住パターンと住民の属性（年齢、所得水準、教育水準、就業形態など）の特徴がつかめるならば、このことを介して、アンマン県の発展のパターンを明らかにできるであろう。そこで、このことを明らかにするために、県の下位行政単位である地区(liwā’リワー)に注目して考察を進めよう。

地図：アンマン県の行政地区（リワー）



(出所)ヨルダン統計局デジタル地図

県の行政区分の変更はその下位行政単位である地区の行政区分の変更を伴っていた。2010 年現在、県としてのアンマンは 9 つの「地区」に分かれている。カサバ・アンマン、 マルカ、クエスマ、ジャーミア、ワディ・シール、サハーブ、ナウール、ムワッカル、ジーザである。この区分は、1995 年以降、新しく導入された地区区分であるが、アンマンからザルカとマダバが独立し、アンマンの行政区分が変更されたときと同時期である。以下、先行研究を参考にしながら、アンマンの都市空間の拡大を跡づけつつ、それぞれの地区の特徴を抽出し、その類型化を試みてみよう。

アンマンは 1800 年代後半にチェルケス人が現在のカサバ・アンマン内にあるジャバル・カラアに移住したことが起源とされている(Kadhim 他 1998)。この地域を中心にアンマンは周囲へ発展していったが、その発展は、Al Rawashdeh 他(2006)と Makhamreh 他(2011)によると、アンマンと他の主要都市を結ぶ道路に沿っていたという。実際、道路はカサバ・アンマンに集まっており、そこから東西南北へと都市をつなぐ形で伸びている（地図 1 を参照）。

アンマンの都市空間の発展を道路網の整備と結びつけると、以下のように説明できる。まず、1950 年代ごろからカサバ・アンマンを中心として、アンマンの北東に位置するザルカへと向かう道路ができ、その道路が通るマルカが発展した。

同時に、北西にあるイルビドやジェラシュへ道路が延びた。その結果、道路が通るジャーミアやワディ・シールが発展し、そこに集落が形成された。このアンマン西部の地域には肥沃な土地が多い。

次に、1980 年代にはアンマン南部のジーザに空港が設立されたため、そこへと向かうクエスマを通る道路の周りに集落が形成され始めた。このマルカ、クエスマを含めたアンマン東部は砂漠地帯が多いのが特徴である。

一方、アンマン県を構成する残りのサハーブ、ムワッカル、ジーザ、ナウールは近年になって発展した新しい地域である。2000 年代は、資源が豊かなアンマン西部へ開発が進められた時代であったが、同時にアンマン南部や南西のマダバへ向かう道路に沿っても都市が広がった。以上から、アンマンの地区編成は次のようにまとめられる。

（1）カサバ・アンマン地区。最も古くからある、山に囲まれた盆地にあるアンマンの旧市街である。
（2）ジャーミア、ワディ・シール、マルカ、クエスマの郊外の 4 地区。カサバ・アンマンの郊外にあり、昔から集落はあったが、1980 年代までに都市化が進んだ。
（3）郊外の 4 地区は、砂漠地帯が多いアンマンの東部のマルカ、クエスマの 2 地区と、山間部に位置するアンマン西部のジャーミア、ワディ・シールの 2 地区に分けることができる。
（4）ナウール、サハーブ、ムワッカル、ジーザの 4 地区。近年、開発が進みつつある。

3. 地区別にみたアンマン住民の構成

以下、上記の地区分類を念頭に置いて、アンマン県の地区ごとに住民の基本属性と社会経済的属性、そして住民と親の出身地を順次、解説していく。

3-1 アンマン住民の基本属性

ここで基本属性として取り上げられるのは、世帯構造、年齢・性構成、婚姻パターンの 3 つである。

3-1-1 世帯の規模と構造（図表 4、4）

世帯規模については、上記地区分類における第四範疇、つまり、アンマンの旧市街から遠く離れ、近年、開発が進みつつあるナウール、サハーブ、ムワッカル、ジーザの 4 地区において、世帯規模が大きい。

世帯構造については、地区の区別なく夫婦と子供からなる核家族が圧倒的に多く、全ての地区で 6 割を越えている。また、夫婦のみや世帯主と子供の世帯を加えれば約 8 割に達する。

世帯に 1 人以上のメイドがいるメイド付き世帯、世帯主に妻が 2 人以上いるポリガミーの世帯、世帯主を中心とした直系 3 世代からなる三世代世帯、さらに図表 5 において、その他と分類された世帯として、世帯主の甥・姪やいとこなどの親戚と同居している世帯、夫婦と孫の世帯、世帯主と兄弟が同居する世帯なども少ないながらも存在する。

このうち、メイド付き世帯はジャーミアとワディ・シールに、ポリガミーの世帯はジーザ、ムワッカル、ナウールに、三世代世帯はカサバ・アンマン、マルカに多い。

3-1-2 年齢・性構成（図表 6、7）

性別については、数値にばらつきはあるものの、とりたてて指摘すべき傾向やパターンは観察されない。そこで、もっぱら年齢構成に限って解説を行う。

世帯主の年齢については、マルカ、クエスマ、ナウールでは 20 代・30 代の世帯主が 3 割以上を占め、比較的若い世帯が多い。一方、カサバ・アンマン、ジャーミア、ワディ・シール、ナウールでは 60 代以上の世帯主が 3 割以上を占め、比較的年嵩の世帯が多い。

世帯員の年齢に目を移すと、クエスマ、ムワッカル、ナウールでは 30 代以下が 8 割を越え、50 代以上が少ないことから比較的若年層が多い地区である。一方、カサバ・アンマン、ジャーミア、ワディ・シールでは 50 代以上が 15%を越え、30 代以下が少ないことから比較的高齢層が多い地区である。

3-1-3 婚姻パターン（図表 8）

家族関係のありかたと関係を持つ婚姻については、地区の違いを越えて、血縁関係のない婚姻が多い傾向にある。とりわけカサバ・アンマン、マルカ、クエスマ、ジャーミア、ワディ・シールでは、その比率はいずれも 50%を越えている。最もその比率が高いのは、クエスマの 64%である。

一方、血縁関係のある結婚では、父方のいとこや親族との婚姻が多い傾向にある。とりわけ、サハーブ、ジーザ、ムワッカル、ナウールでは父方のいとこと親族との結婚が 3 割を越え、他の地区と比べ多い。

3-2 アンマン住民の社会経済状況

先に指摘したように、本ペーパーが依拠する世帯調査はヨルダン統計局の家計調査（2008/2009 年）をベースに実施され、家計調査で網羅している所得と消費などの質問項目は世帯調査で割愛された。そこで、以下、教育と就業を除く、所得に関する項目については、2008/2009 年家計調査のデータを用いる。ここで社会経済的属性として取り上げられるのは、所得分布、就業形態、教育水準の三つである。

3-2-1 所得分布（図表 9）

まず所得分布をみてみよう。世帯所得は、賃金所得、自営業所得、賃貸所得、不動産所得、移転所得、その他の所得を合計した年間世帯総所得である。ここでの移転所得とは、労働や金融資産、非金融資産以外から得ている所得をさす。たとえば、年金、保険、海外からの送金などである。

調査の対象となった世帯の所得水準を地区別にみると、地区の間でばらつきがみられる。最も所得水準が高い地区はジャーミアとワディ・シール、最も低い地区はナウール、次いでカサバ・アンマンである。それ以外の地区、すなわちマルカ、クエスマ、ジーザ、ムワッカルは中間的な所得水準である。

3-2-2 就業形態（図表 10）

次に、所得の源泉を住民の就業形態からみてみよう。まず指摘すべきは、どの地区でも賃金雇用が主だということである。しかし、カサバ・アンマンとマルカ、クエスマ、ジーザ、ナウールでは自営業を営む世帯がやや多い傾向にある。自営業者の従事する産業は、カサバ・アンマンでは卸・小売業、マルカとクエスマでは卸・小売業と運輸・通信業、ジーザとナウールでは農業および運輸・通信業が主である。

賃金雇用を就業部門、産業部門、職業地位別にみた場合、就業部門では、公共部門就業者がどの地区でも多いが、とりわけジゼ、ムワッカル、ナウールではその数が 50%以上を占める。

産業部門では、公共部門就業者の多くは一般行政・防衛業ならびにコミュニティ・社会・個人サービス業従事者である。つまり、公務員や警察での単純労働者や運転手、ごみ収集や宗教施設・NGO などでの事務職員や単純労働者などである。とりわけナウールでは、公共部門就業者が就業者の 6 割で突出して多いが、彼らの大半は警察に務めている。

一方、カサバ・アンマン、マルカ、クエスマ、ジャーミア、サハーブでは政府部門就業者が少なく、民間部門就業者が就業者の 6 割を超える。彼らの多くは、石鹸等の化学製品や家具などの製造業、卸・小売業、タクシーなどの運輸業に従事している。とくにクエスマでは製造業従事者が多いが、彼らの多くは家具などの製造に従事する熟練・非熟練労働者である。

職業地位では、ジャーミア、ワディ・シールでは、会計士などの専門職従事者が多く、民間部門就業者のなかでも職業地位の高い就業者が多い。ジャーミアは民間企業に勤めるホワイトカラー層が多い特徴をもつ。またワディ・シールは政府部門、民間部門がほぼ同程度の割合を占め、ジャーミアと同様に職業地位の高い就業者が多い。これに対して、カ

サバ・アンマン、マルカ、クエスマ、サハーブでは、民間部門を中心に熟練・非熟練労働者が多い。

3-2-3 教育水準（図表 11）

ヨルダン統計局の分類では、教育水準のうち非就学者は読み書き可と非識字に分類される。ヨルダンにおける教育システムは、6 歳から 15 歳まで小学校と中学校を含めた 10 年間の基礎教育が行われる。その後、専門学校か高校か選び、2 年間学ぶ。高校を選んだ学生は大学へと進むことが可能である。

世帯主の教育水準では、大卒以上がマルカ、クエスマ、ジャーミア、ワディ・シール、サハーブで 2 割を越えており、教育水準が高い傾向にある。とりわけジャーミアでは大卒以上が 5 割弱と非常に高く、教育水準が高い世帯主が多い。

一方、教育を受けていない非識字者と読み書き可の世帯主はカサバ・アンマン、サハーブ、ジーザ、ムワッカル、ナウールでは 2 割以上であり、これらの地区の教育水準は低い。とりわけジーザでは、教育を受けていない非識字者と読み書き可の世帯主が 3 割以上を占めている。

世帯員の教育水準では、ジーザ、ムワッカル、ナウールで非識字者がやや多く、対照的に、マルカ、ジャーミア、ワディ・シールで大卒以上が多い。とりわけジャーミアでは大卒以上が 3 割を越え、非識字者も 3%と地区の中で最も低く、教育水準が高い。

3-2-4 住民と親の出身地

ここでは、地区ごとの住民の出身地について見ていく。ここで取り上げられるのは、世帯主の出身地、世帯員の出身地、世帯主の父親の出身地、世帯主の母親の出身地の四つである。世帯主、世帯員の出身地を確認した後、世帯主の父親と母親の出身地について確認する。先に述べたように、アンマンには多くの外国人移民・難民や国内移民の流入があった。そのため、出身地はアンマンにおける住民の生活を知る際に重要な指標になると考えられる。

出身地の項目として、ヨルダン内とは、ヨルダン出身だがアンマン以外の出身者である。アラブ諸国とは、UAE(アラブ首長国連邦)、バハレーン、サウジアラビア、シリア、イラク、オマーン、パレスチナ、カタール、クウェート、レバノン、イエメンである。

3-2-4-1 世帯主と世帯員の出身地（図表 12）

世帯主の出身地に関しては、アンマン出身者がジャーミアを除いて全体的に多く、とりわけムワッカル、ナウールで多い傾向にある。ヨルダン内出身者に着目すると、ジャーミアで突出して多く 20.4%を占めている。アラブ諸国出身者に関しては、カサバ・アンマン、マルカ、クエスマ、ジャーミア、ワディ・シール、サハーブ、ジーザで多い傾向にある。とりわけカサバ・アンマン、マルカ、クエスマ、ジャーミアで顕著であり、いずれの地区も約 4 割を占める。

世帯員の出身地に関しては、アンマンでは若年層が多いこともあり、全体としてアンマン出身が最も多い。だが、ヨルダン内出身者でいえば、世帯主同様全地区の中でジャーミアが突出して多く、16.1%を占める。アラブ諸国に着目すると、カサバ・アンマン、マルカ、クエスマ、ジャーミア、ワディ・シールでヨルダン以外のアラブ諸国出身者がやや多い傾向にある。

3-2-4-2 世帯主の父親と母親の出身地（図表 13）

世帯主の父親の出身地では、移住してきた住民が多い地区と、そうではない地区の 2 つにわけることが可能であり、地区ごとでの違いが明らかである。つまり、アンマン以外の出身者はカサバ・アンマン、マルカ、クエスマ、ジャーミアで多く、いずれの地区も半数を越える。一方、アンマン内出身者はワディ・シール、サハーブ、ジーザ、ムワッカル、

ナウールで多く、これら 5 地区も半数を越える。
　世帯主の母親の出身地では、アンマン内出身者の母親をもつ世帯主はワディ・シール、サハーブ、ジーザ、ムワッカル、ナウールで多い。ヨルダン内出身に関しては、カサバ・アンマン、マルカ、ジャーミアで多い傾向にある。一方、ヨルダン外出身者は、カサバ・アンマン、マルカ、クエスマ、ジャーミア、ワディ・シール、サハーブ、ジーザで多いが、とりわけカサバ・アンマン、マルカ、クエスマ、ジャーミアでは 5 割を越えている。結果として、世帯主の父親と母親の出身地については、似た傾向にある。

4.　住宅形態からみたアンマン住民の構成

　ヨルダンでは、3 つの住宅形態が併存している。ヴィラ、ダール、アパートである。その定義は追って説明するが、それは住民の資産規模を示すとともに、生活様式の違いを示す。つまり、ヴィラは高所得の資産家の、ダールは伝統的な生活文化を好む住民の、アパートは近代的な生活文化を好む住民の住居形態だという具合である。そこで、以下、世帯調査で得られたデータをこの 3 つの住宅形態別に整理してみよう。

4-1 住宅居住の三範疇

　アンマンにおける住宅形態はヴィラ、ダール、アパートの 3 つに分かれる。ヨルダン統計局による定義は以下のとおりである。
　ヴィラ：「通常切り石で建てられ、1 階以上あり、屋内において階段でつながっている。1 つ以上の部屋があり、それぞれ寝室、居間、キッチンなどに利用される。たいてい庭(面積は問わない)、石塀やガレージ、レンガ屋根がある」。
　ダール：「1 部屋以上の伝統的建物であり、部屋の配置は一直線あるいは散り散りで、塀に囲まれている。築年数にかかわらずダールであり、天井につながる階段が屋外あるいは屋内にあれば、2 階以上でもありうる」。
　アパート：「1 つ以上の部屋で構成される建物の一部である。また、全ての部屋に直接つながる玄関が 1 つ以上ある」。

4-2 地区別住宅居住形態(図表 14)

　調査対象の 1194 世帯のうち、17 世帯（1.4%）がヴィラで、274 世帯（23.0%）がダールで、902 世帯（75.5%）がアパートで居住している。したがって、アンマンの住民の圧倒的多数がアパート住まいということになる。
　地区別にみるならば、カサバ・アンマン、マルカ、クエスマ、ジャーミア、ワディ・シール、サハーブは、アパートに住む人々が 7 割を越えている。対照的に、ジーザ、ムワッカ、ナウールではダールに住む人々が 5 割を越えている。また、ヴィラはジャーミアとワディ・シールにおいて多数存在している。
　住宅の所有形態に関しては、全体としては持家が多い。ただし、カサバ・アンマン、マルカ、クエスマ、ジャーミア、ワディ・シール、サハーブでは借家が約 2 割から 4 割弱と少ないわけではない。また、ワディ・シール、ナウールでは無償提供の住宅が多い。給与住宅について、数は少ないながらも、ジャーミア、ワディ・シールに見られる。

4-3 住宅形態別住民の基本属性(図表 15)

　　ここで取り上げる基本属性とは、年齢、世帯規模、性別、出身地、婚姻状態、配偶者との血縁関係の 5 つである。世帯主の性別については、住居形態別による大きな差は見られないところから、以下で解説されるのは、それ以外の属性である。
　年齢構成に関しては、ヴィラに居住する世帯主が最も年齢が高く、次いでダール、アパートに住む世帯主の年齢が最も低い。具体的には、ヴィラで最も多い年代は、50 代と 60 代であり、それぞれ 29.4%を占めている。ダールは 40 代の 27.3%であり、ついで 50 代の 21.5%

である。アパートに住むのは、30 代が 24.3%を占め最も多く、ついで 40 代の 21.4%である。
すなわち、ヴィラは 50 代と 60 代が、ダールは 40 代と 50 代が、アパートは 30 代と 40 代が中心となっている。これは、平均年齢からも読み取ることができる。つまり、ヴィラに居住する世帯主の平均年齢は 54.6 歳と最も高く、次いでダールの 51.2 歳、そしてアパートに住む世帯主の平均年齢は 49.9 歳と最も低い。
世帯規模に関しては、ヴィラとダールに比べて、アパートに住む調査サンプルは、世帯の規模がやや小さい傾向にあることである。世帯規模の平均だけ見ると、アパートでの世帯規模が最も小さく、5.5 人である。一方、ヴィラとダールはそれぞれ 6.7 人、6.3 人と大きな差はないようである。
出身地について確認していく。住宅形態によって、やや差が見られる。すなわち、ダールの住む調査サンプルはアンマン内出身者が多いが、それと比較するとアパートやヴィラではアンマン外の出身者が多い傾向にある。具体的に見ていく。どの住居形態もアンマン内出身者が最も多いが、その割合はやや異なる。すなわち、ダールに住む調査サンプルは 75.3%と多くがアンマン生まれである。しかし、アパートに住む調査サンプルは約 54%と少なく、次いでアラブ諸国出身者が 36.9%を占めている。一方、ヴィラでは、アンマン出身者は約 4 割しかおらず、ヨルダン内出身者が約 35%、アラブ諸国出身者は 23.5%である。
次に、婚姻形態であるが、住宅形態別の差はほとんど見られない。そこで、配偶者との婚姻関係を認していく。ここでは、婚姻状態において、未婚と答えた調査サンプルの以外を対象としている。ヴィラではダールやアパートと比べて、血縁なしが 58.8%とやや多い。一方、ダールでは血縁なしが 48.9%とやや低い傾向にある。代わりに、同じ地域からや血縁がある結婚が多い。とりわけ、父方のいとことの結婚が多い傾向にある。

4-4 住宅形態別住民の社会経済的属性(図表 16)
ここで取り上げる社会経済的属性とは、教育水準、就業構造、セクター、職業地位、世帯所得の 5 つである。教育水準、世帯所得を除く 3 属性は、回答者が回答した時点で働いている人、あるいはかつて働いた経験がある人のみを対象としたため、全体の総数は 916 人となっている。
教育水準に関しては、ヴィラに住む世帯主の教育水準が高い傾向にあるが、ダールに住む世帯主の教育水準は低い傾向にある。具体的に見ていきたい。大学卒業者を確認すると、ヴィラに住む世帯主が 64.7%と突出して高く、教育水準が高い傾向にあることが明らかである。そこで、ダールとアパートを比較してみる。小学校あるいは中学校卒業の教育水準をもつ世帯主の割合は、それぞれ 43.6%、46.1%と大きな差はない。そこで、教育を受けていない人々である非識字者、読み書きのみの合計を確認してみると、ダールとアパートはそれぞれ 31%、16.4%とダールに住む世帯主の方が教育水準はやや低い傾向にある。
就業構造に関しては、ヴィラやダールに住む世帯主の職は主に一般行政・防衛であるが、アパートに住む世帯主の職種は多岐に渡っている。具体的な数値を検討すると、ヴィラ、ダールの一般行政・防衛に勤める世帯主の割合はそれぞれ 46.2%、40.1%である。しかし、アパートにおいては、全体で最も高い割合であるものの、17.1%しかいない。次に多いのが製造業であり 16.5%、ついで卸小売・修理業で 14.9%と、偏りが少ないことが明らかである。その他第 3 次産業については、ヴィラでは保健・ソーシャルワークや不動産・賃貸・事業サービス業が中心である。
勤めるセクターに関しては、結果は就業構造に大きく影響していると考えられる。すなわち、ヴィラとダールに居住する世帯主は公共部門が多く、それぞれ 53.9%と 56%である。一方、アパートに住む世帯主は公共部門が 31.8%しかおらず、対照的に民間部門で 60.5%を占めている。ヴィラとダールにおける公共部門の割合の多さは、一般行政・防衛に関する職に就いている世帯主が多いためである。なぜなら、一般行政・防衛は必ず公共部門に属するためである。
職業地位に関しては、ヴィラでは突出して職業地位が高く、ダールが最も低い傾向にあ

る。具体的には、ヴィラでは専門職が 46.2%を占め、技師、準専門職と事務補助員を加えれば 77%を占めている。しかし、ダールとアパートの同様のカテゴリの合計割合はそれぞれ 26.1%、34.8%とヴィラで突出していることが明らかである。一方、ダールでは設備・機械の運転・組立工と単純作業の従事者の合計割合は、56%を占めている。アパートでは同様のカテゴリがダールの方が職業地位はやや低い傾向にある。

最後に、世帯所得に関しては、ヴィラに住む住民の所得が突出して高く、ダールとアパートではほぼ差はないものの、ややダールの方が高い傾向にある。平均所得を確認すると、14698.3JD であり、ダール、アパートに住む住民の約 2 倍の所得であり、突出して高い。実際、ヴィラに住む人々の世帯所得が 10000JD 以上である世帯は 70%を越え、ダールの 18.6%、アパートの 16.4%に対して 50%以上の差がある。次に、ダールとアパートを比較すると、いずれも世帯所得が 3000JD から 4800JD 未満である世帯が最も多く、それぞれ 28.7%と 33%を占めており、大きな差はない。ただし、平均所得はダールとアパートがそれぞれ 7637.6JD と 6900.2JD であり、ダールの方がやや高い。

4-5 アンマン住民構成の住宅形態別特徴

住宅形態の違いがアンマン住民構成の分析のうえで大きな示唆を与えることは、あきらかである。ヴィラは資産家の高級住宅である。実際、ヴィラに居住する住民はほかの住宅形態に居住する住民と違った属性をもっている。すなわち、年齢層、世帯規模、教育水準、職業地位、世帯所得いずれの項目もヴィラやダールの住民に比べて高く、とりわけ教育水準、世帯所得、職業地位が突出している。また、職業は一般行政・防衛に勤務する傾向にあり、アンマン以外の出身者がやや多い。加えて、配偶者との血縁的つながりはうすい傾向にある。ヴィラのような高級住宅は資産と所得の規模に相関し、その立地が大きく地区の違いに関係するとは思われない。それがジャーミア、ワディ・シールに集中しているところから、この 2 つの地区が高級住宅地ということになろう。

これに対して、ダールとアパートでは立地の上で大きな違いが見られる。ダールはヨルダンで古くから建てられている独立した伝統的住居であり、主に農村部における中流階層以下の住民の住居である。実際、ダールに居住する住民の属性は、アンマン出身者が多く、加えて配偶者との血縁的つながりが濃い傾向にある。また、教育水準、職業地位ともにヴィラやアパートに住む住民に比べて低い。職業は、一般行政・防衛に勤務する住民が多い。したがって、ダールが多く展開しているナウール、ムワッカ、ジーザの 3 つが伝統的な生活様式を好む地区ということになる。

一方、アパートは狭い土地にできる限り多くの住民を住まわせる目的をもち、居住のための空間が限られているアンマンでは、建物が高層化されざるを得ないということを考えるならば、都市部に住む中流階層以下の住民のための住居である。実際、アパートに住む住民の属性は、年齢層、世帯規模、世帯所得のいずれもヴィラやダールに住む住民よりも低い傾向にある。勤務する職業に大きな偏りはないが、製造業、卸小売・修理業に多い傾向にある。したがって、アパートが多く展開しているカサバ・アンマン、マルカ、クエスマ、ジャーミア、ワディ・シール、サハーブの六つのうち、高級住宅地のジャーミア、ワディ・シールを除く 4 つが、近代的な生活様式を好む地区ということになる。実際、これらの地区では、アンマン県の都市化の進行により、家族や親族はダールの独立住宅ではなく、同じ建物にあるアパートのなかで共住するようになっている。

5. 総括

以上のアンマン住民構成の住居形態別特徴を踏まえて、改めてアンマン住民構成の地区別特徴を整理してみよう。取り上げた指標のうち、地区の特徴を示す数値が観察されるのは住宅の種類、世帯規模、就業構造、世帯所得、出生地、教育水準である(図表 17)。就業構

造、出生地、教育水準は、世帯主の属性を指す。また、世帯所得は所得のある世帯員全員の合計所得である[8]。それらに基づいて地区の範疇を抽出すると、次の 4 点に整理される。

(1) カサバ・アンマン、マルカ、クエスマ：次の諸点において似た性格が観察される地区である。世帯規模が小さいこと、アンマン外出身者が多いこと、民間部門に勤める住民が大多数であること、住宅の特徴に関してアパートに住む住民が多いこと。しかし、カサバ・アンマンに関しては、マルカ、クエスマに比べやや教育水準が低い住民が多く、また所得も低いという点で異なる。
(2) ジャーミア、ワディ・シール：住民の多くが高所得者であり、教育水準が高い地区である。しかし、ジャーミアでは、外国を含めたアンマン外から来た住民、とりわけヨルダン内のアンマン以外の地域から来た住民が多いという点で突出している。これに関しては、この地区にヨルダン大学があることも影響していると考えられる。これに対して、ワディ・シールでは、アンマン出身者が多数を占めている。
(3) ムワッカル、ジーザ、ナウール：次の諸点において似た性格が観察される地区である。世帯規模が大きいこと、教育水準が低い傾向にあること、政府部門の就業者が多数を占めること、移住してきた人々が少なく、アンマン出身者が大多数であること、住宅はダールに住む住民が多いこと。この最後の点は、顕著な特徴である。つまり、ほかの地区はアパートかつ借家が多いため、一時的な居住者あるいは最近移り住んできた住民が多いと考えられる一方、この 3 つの地区は持家が多くダールに住む人々が多いため、昔から居住している住民が多いと思われる。
(4) サハーブ：アンマン内出身者が多いという点では(3)の 3 地区に近いが、就業構造に関して民間部門に勤める住民が多いという点で上記 3 地区とは異なる。

[8]残りの属性は地区による特徴が見受けられず、表にのせていない。例えば、世帯主の年齢構造はマルカ、クエスマで低く、カサバ・アンマン、ジャーミア、ワディ・シールで高い傾向にある。しかし、ナウールではばらつきが大きく、20 代・30 代や 60 代以上にやや集中している。

参考文献

<日本語文献>
岩永尚子[2004]「ヨルダンにおける近代教育の拡大に関する考察(1950-98 年) : 主体間の相互作用の視点から」『日本中東学会年報』第 20 巻、151-173 頁。
臼杵悠[2012]「ヨルダンにおける都市社会：世帯調査から見るアンマンの社会経済的属性と居住パターン」修士論文（未刊行）。
加藤久和[2001]『人口経済学入門』日本評論社。
北澤義之[2000]「第 5 章　ヨルダンの地方行政制度と国家統合」伊能武次・松本弘共編『〈JIIA 研究２〉現代中東の国家と地方(Ⅰ)』日本国際問題研究所、105-130 頁。
小島宏[2008]「第 6 章 中東・北アフリカ：イスラームと人口」早瀬保子・大淵寛編著『世界主要国・地域の人口問題(人口学ライブラリー 8)』原書房、127-159 頁。
土屋一樹[2006]「貿易協定と産業発展 －ヨルダンの QIZ 協定－」『現代の中東』41, 21-36 頁。
中村良平・田渕 隆俊[2008]『都市と地域の経済学』有斐閣。
山口 直彦[2010]『アラブ経済史—1810~2009 年— (世界歴史叢書)』明石書店。

<英語文献>
Abu-Dayyeh, Nabil and Ziadat , Firas (2005) “GIS for understanding physical and social change in urban settings: a case from Amman, Jordan*” Environment and Planning B: Planning and Design*, volume 32, pp.127 -140.
Administration Office (eds) (2010) "Amman Household Survey 2008" (Research Report Series No.10).
Al Rawashdeh, S. and B., Saleh (2006) “Satellite monitoring of urban spatial growth in the Amman area, Jordan” *Journal of Urban Planning and Development*, 132, pp. 211–216.
Barney C. (2004) “Urban growth in developing countries: a review of current trends and a caution regarding existing forecasts” *World Dev*; 32(1), pp.23-51.
Dumper, Michael Richard Thomas & Bruce Stanley (eds) (2006) *Cities of the Middle East and North Africa: A Historical Encyclopedia*, ABC-CLIO.
Doan, PL (1991) “Changing Administrative Regions in Jordan: Regional Development Strategy or distraction?” *Tijdschrift voor economische en sociale geografie*, 82(3), pp.177–184.
Fadda , Eyad H. R.& Maher Kakish & Tariq A. Al Azab(2009) “The implementation of Satellite images and associated digital image processing in addition to GIS modelling for urban mapping in Amman area, Jordan” *Wseas Transactions on Communications,* Volume 8, Issue 2, pp.300-309.
Gerlach, Esther. & Richard Franceys (2009) “Regulating water services for the poor: The case of Amman” *Geoforum* 40, pp431-441.
Hindle, Peter (1964) “The Population of the Hashemite Kingdom of Jordan 1961” *The Geographical Journal* , 130(2), pp.261-264.
Department of Statistics, Jordan (eds.) (1961) *First census of population and housing 18th November 1961.*
Department of Statistics, Jordan (eds.) (1979) *Housing and population census 1979.*
Department of Statistics, Jordan (eds.) (1994) *Jordan General Population and Housing Census 1994.*
Department of Statistics, Jordan (eds.) (2004)*Jordan Population and Housing Census 2004.*
Department of Statistics, Jordan (eds.) (2005)*Statistical Yearbook 2005.*
Kadhim, M.B. and Rajjal, Y. (1988) “City profile Amman” *Cities*, 5(4), pp.318-325.
Makhamreh, Zeyad and Almanasyeha, Nazeeh (2011) “Analyzing the State and Pattern of Urban Growth and City Planning in Amman Using Satellite Images and GIS” *European Journal of Social Sciences*, 24(2), pp.252-264.
Municipality of Greater Amman (1993) “Greater Amman Urban development” *Cities*, 10(1), pp.37-49.

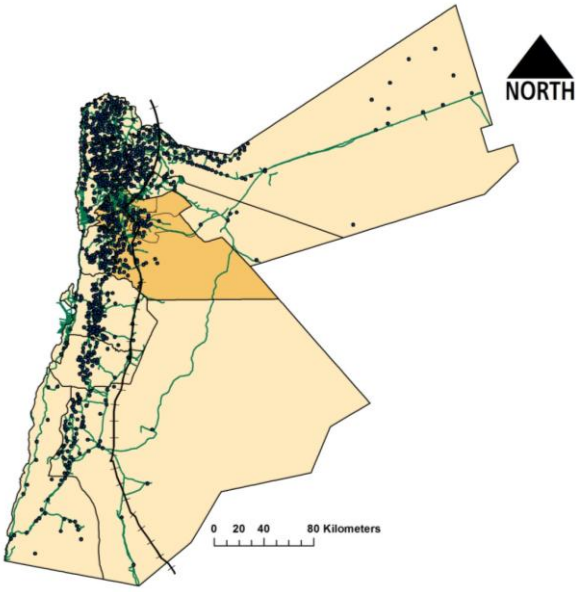
Potter, Robert B, Khadija Darmame, Nasim Barham & Stephen Nortcliff (2009) “”Ever-growing Amman”, Jordan: Urban expansion, social polarization and contemporary urban planning issues” *Habitat International* 33, pp. 81- 92.

Saleh, Bassam and Al Rawashdeh, Samih(2007) ”Study of Urban Expansion in Jordanian Cities Using GIS and Remoth Sensing” *International Journal of Applied Science and Engineering*, pp.41-52.

United Nations. Economic and Social Commission for Western Asia (2005) *Urbanization and the changing character of the Arab city*, New York: United Nations.

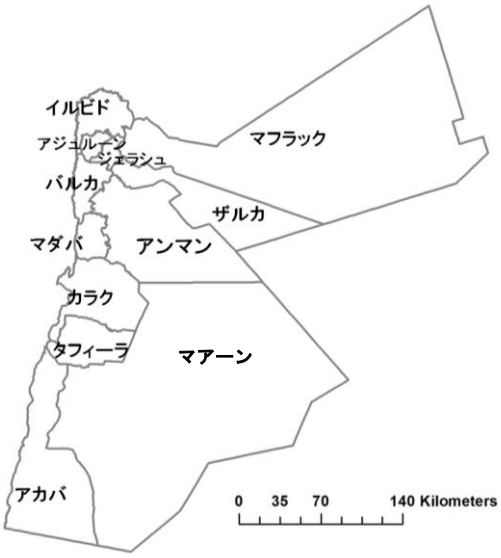
Winckler, Onn and Gilbar, Gad G. (eds.) (1997) *Population Growth and Migration in Jordan, 1950-1994*, Sussex Academic Press.

地図 1 ヨルダンにおける交通網



(出所)ヨルダン統計局デジタル地図

地図 2 ヨルダンにおける行政区分



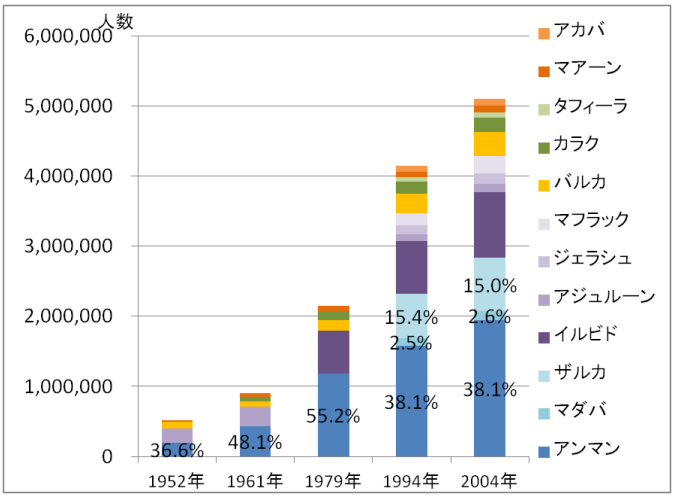
(出所)ヨルダン統計局デジタル地図

図表 1 ヨルダンにおける行政区分の移り変わり

1950 年ごろ	1985 年ごろ	1995 年以降
アンマン	アンマン	アンマン
		マダバ
	ザルカ	ザルカ
イルビド	イルビド	イルビド
		アジュルーン
		ジェラシュ
	マクラック	マフラック
バルカ	バルカ	バルカ
カラク	カラク	カラク
	タフィーラ	タフィーラ
マアーン		マアーン
		アカバ

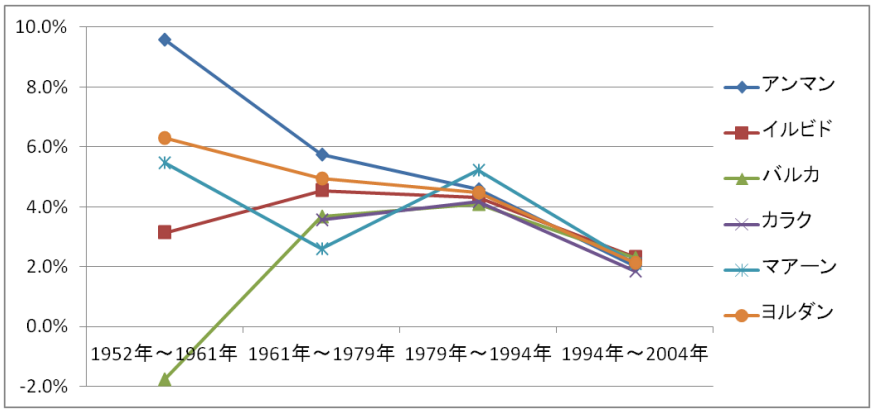
(出所)北澤(2000)を基に筆者作成)

図表 2　行政区ごとのヨルダンの人口変遷



(出所)1952 年、1961 年、1979 年、1994 年、2004 年のヨルダンセンサスより筆者作成

図表 3 県ごとにおける年平均人口増加率の推移



(出所) 1952 年、1961 年、1979 年、1994 年、2004 年のヨルダンセンサスをもとに筆者作成

図表 4 世帯構成(単位:%)

	世帯数	世帯員総数	世帯規模(人)	世帯員平均年齢	世帯主平均年齢	子供の数の平均
カサバ・アンマン	248	1,355	5.6	27.5	52.6	3.4
マルカ	223	1,186	5.7	26.0	49.1	3.1
クエスマ	119	675	5.3	23.6	47.1	3.6
ジャーミア	147	816	5.1	27.2	50.7	3.4
ワディ・シール	142	778	5.4	26.9	51.7	3.3
サハーブ	68	417	5.2	25.0	51.0	3.9
ナウール	81	489	6.1	24.2	48.7	4.0
ムワッカル	87	602	7.5	22.8	48.1	4.5
ジーザ	79	513	6.4	25.6	51.1	4.3
計	1,194	6,831	5.7	25.8	50.3	3.5

(出所)アンマン世帯調査のデータ

図表 5 世帯構造(単位:%)

	世帯構造									
	単独世帯	夫婦のみ	夫婦＋子供	世帯主＋子供	メイド付き	ポリガミー	三世代世帯	その他	計	世帯数
カサバ・アンマン	3.2	4.0	68.5	8.5	2.0	0.4	10.5	2.8	100	248
マルカ	3.6	7.6	66.4	6.3	0.4	0.0	10.3	5.4	100	223
クエスマ	0.8	5.9	77.3	3.4	2.5	0.0	5.0	5.0	100	119
ジャーミア	0.7	2.7	75.5	6.8	4.1	0.0	7.5	2.7	100	147
ワディ・シール	1.4	5.6	69.0	8.5	5.6	0.0	8.5	1.4	100	142
サハーブ	2.9	4.4	73.5	4.4	2.9	0.0	8.8	2.9	100	68
ナウール	3.8	2.5	67.1	13.9	1.3	1.3	5.1	5.1	100	79
ムワッカル	2.3	0.0	79.3	5.7	0.0	1.1	8.0	3.4	100	87
ジーザ	4.9	3.7	77.8	3.7	0.0	3.7	2.5	3.7	100	81
計	2.6	4.5	71.5	7.0	2.2	0.5	8.1	3.6	100	1194

(出所)アンマン世帯調査のデータ

図表 6 世帯主の年齢構成・性別(単位:%)

	世帯主の年齢構成・性別									
	20 代	30 代	40 代	50 代	60 代	70 代	男性	女性	計	人数
カサバ・アンマン	3.6	19.0	22.6	21.4	19.8	13.7	85.1	14.9	100	248
マルカ	4.9	26.5	23.8	19.7	13.0	12.1	89.2	10.8	100	223
クエスマ	5.0	34.5	21.8	16.8	15.1	6.7	89.9	10.1	100	119
ジャーミア	5.4	23.1	17.7	23.1	24.5	6.1	90.5	9.5	100	147
ワディ・シール	4.9	22.5	21.1	16.9	21.8	12.7	87.3	12.7	100	142
サハーブ	10.3	10.3	30.9	19.1	14.7	14.7	88.2	11.8	100	68
ナウール	9.9	27.2	19.8	9.9	22.2	11.1	91.4	8.6	100	81
ムワッカル	8.0	18.4	33.3	20.7	10.3	9.2	87.4	12.6	100	87
ジーザ	5.1	20.3	19.0	26.6	20.3	8.9	84.8	15.2	100	79
計	5.6	22.9	22.8	19.7	18.1	10.9	88.0	12.0	100	1,194

(出所)アンマン世帯調査のデータ

図表 7 世帯員の年齢構成・性別(単位:%)

	世帯員の年齢構成・性別											
	9 歳以下	10 代	20 代	30 代	40 代	50 代	60 代	70 代以上	男性	女性	計	人数
カサバ・アンマン	20.7	23.8	16.5	13.2	9.4	6.6	5.7	4.1	50.9	49.1	100	1,355
マルカ	23.4	21.4	18.5	12.6	10.1	6.6	4.0	3.3	52.4	47.6	100	1,186
クエスマ	27.0	24.7	16.0	13.2	8.3	5.2	3.7	1.9	52.1	47.9	100	675
ジャーミア	19.6	21.3	22.9	11.4	8.1	8.6	6.3	1.8	52.0	48.0	100	816
ワディ・シール	21.0	23.0	18.8	12.6	9.1	6.0	5.9	3.6	49.5	50.5	100	778
サハーブ	20.1	29.0	21.6	6.5	9.8	5.8	3.8	3.4	51.3	48.7	100	417
ナウール	23.5	25.4	19.6	13.5	6.1	4.5	5.5	1.8	48.5	51.5	100	489
ムワッカル	24.1	29.2	18.9	9.5	10.1	4.3	2.2	1.7	51.0	49.0	100	602
ジーザ	20.3	25.1	21.1	12.9	6.2	7.2	5.3	1.9	50.3	49.7	100	513
計	22.1	24.1	18.9	12.1	8.9	6.3	4.8	2.8	51.1	48.9	100	6,831

(出所)アンマン世帯調査のデータ

図表 8 婚姻パターン(単位:%)

	血縁あり							同じ地域から	血縁なし	計	人数
	父方親族との婚姻			母方親族との婚姻			計				
	父方のいとこ	父方の親族	計	母方のいとこ	母方の親族	計					
カサバ・アンマン	13.9	12.8	26.7	7.2	6.8	13.9	40.6	3.7	55.7	100	517
マルカ	16.1	10.2	26.3	11.1	5.2	16.3	42.5	5.0	52.5	100	461
クエスマ	15.0	8.5	23.5	6.9	4.1	10.9	34.4	1.6	64.0	100	247
ジャーミア	9.9	12.2	22.1	9.2	7.6	16.8	38.9	5.3	55.8	100	303
ワディ・シール	10.8	9.4	20.2	8.4	3.7	12.1	32.3	8.8	58.9	100	297
サハーブ	20.3	10.9	31.2	7.3	5.8	13.1	44.2	7.3	48.6	100	138
ナウール	20.7	11.6	32.3	9.8	6.1	15.9	48.2	7.3	44.5	100	164
ムワッカル	17.4	16.8	34.2	8.4	9.0	17.4	51.6	5.8	42.6	100	190
ジーザ	18.1	12.3	30.3	6.5	7.7	14.2	44.5	9.0	46.5	100	155
計	14.9	11.5	26.4	8.5	6.1	14.6	41.0	5.5	53.6	100	2,472

(出所)アンマン世帯調査のデータ

図表 9 所得分布 (単位:%)

	所得分布構造								
	賃金所得	自営業所得	賃貸所得	不動産所得	移転所得	その他の所得	計	計(JD)	世帯数
カサバ・アンマン	54.6	15.4	11.0	0.7	18.3	0.0	100	5,854.6	248
マルカ	42.7	25.6	13.4	0.0	18.2	0.0	100	7,166.4	223
クエスマ	52.6	20.1	14.6	0.0	12.6	0.0	100	6,088.0	119
ジャーミア	48.2	7.6	20.5	0.0	23.8	0.0	100	9,517.3	147
ワディ・シール	39.3	21.0	20.0	0.9	18.8	0.0	100	9,571.0	142
サハーブ	50.6	6.9	15.2	1.2	26.0	0.0	100	6,595.9	68
ナウール	50.6	7.8	18.6	0.4	22.5	0.0	100	5,672.2	81
ムワッカル	52.4	13.1	14.4	0.4	19.7	0.0	100	6,598.0	87
ジーザ	49.9	20.7	14.7	0.0	14.7	0.0	100	7,083.5	79
計	47.9	16.6	15.8	0.4	19.3	0.0	100	7,181.1	1,194

(出所)アンマン世帯調査と標本家計調査「世帯の所得と消費調査」のデータ

図表 10 就業構造 (単位:%)

	第 1 次産業	第 2 次産業		第 3 次産業						計	人数
	農林業・漁業	鉱業、建築業	製造業	卸小売・修理業	運輸・倉庫・通信業	一般行政・防衛	教育	コミュニティ・社会・個人サービス	その他第 3 次産業		
カサバ・アンマン	0.0	10.7	15.8	20.9	11.9	14.7	9.6	7.9	8.5	100	389
マルカ	0.0	12.0	17.3	17.3	7.9	14.7	13.1	7.9	10.0	100	382
クエスマ	1.1	11.0	23.1	13.2	11.0	13.2	7.7	11.0	8.8	100	182
ジャーミア	0.0	7.3	10.9	11.8	7.3	21.8	15.5	9.1	16.4	100	250
ワディ・シール	0.0	8.1	12.6	14.4	6.3	21.6	11.7	9.0	16.2	100	252
サハーブ	0.0	5.5	14.6	7.3	10.9	30.9	1.8	14.6	14.6	100	123
ナウール	1.8	0.0	5.3	5.3	15.8	52.6	5.3	5.3	8.8	100	114
ムワッカル	2.9	4.4	16.2	1.5	11.8	35.3	2.9	13.2	11.8	100	143
ジーザ	0.0	3.6	12.5	5.4	8.9	41.1	12.5	5.4	10.7	100	129
計	0.4	8.4	15.0	13.3	9.7	22.7	10.0	9.0	11.5	100	1,964

(出所)アンマン世帯調査のデータ

図表 11 世帯主と世帯員の教育水準(単位:%)

	世帯主の教育水準							世帯員の教育水準						
	非識字	読み書きのみ	中卒	高卒	大卒以上	計	世帯数	非識字	読み書きのみ	中卒	高卒	大卒以上	計	人数
カサバ・アンマン	11.3	10.9	53.2	8.9	15.7	100	248	8.5	6.1	53.1	18.9	13.4	100	904
マルカ	6.3	8.1	43.5	20.6	21.5	100	223	5.7	4.7	46.6	21.5	21.5	100	768
クエスマ	5.0	5.0	54.6	14.3	21.0	100	119	4.2	2.5	54.1	22.1	17.2	100	407
ジャーミア	4.8	6.1	31.3	11.6	46.3	100	147	3.0	3.8	37.9	20.9	34.4	100	573
ワディ・シール	10.6	7.8	36.6	16.9	28.2	100	142	7.6	5.9	39.7	24.4	22.5	100	512
サハーブ	16.2	7.4	50.0	5.9	20.6	100	68	8.5	3.9	59.2	15.6	12.8	100	282
ナウール	22.8	11.4	39.2	15.2	11.4	100	79	13.0	4.6	47.3	20.5	14.7	100	347
ムワッカル	17.2	14.9	50.6	9.2	8.1	100	87	11.0	6.2	57.6	15.6	9.7	100	373
ジーザ	18.5	8.6	46.9	16.1	9.9	100	81	11.0	3.6	56.8	19.8	8.8	100	308
計	10.8	8.8	45.1	13.7	21.6	100	1,194	7.6	4.8	49.2	20.2	18.3	100	4,474

(出所)アンマン世帯調査のデータ

図表 12 世帯主と世帯員の出生地(単位:%)

	世帯主の出身地						世帯員の出身地					
	アンマン	ヨルダン内	アラブ諸国	その他	計	人数	アンマン	ヨルダン内	アラブ諸国	その他	計	人数
カサバ・アンマン	55.2	5.7	38.7	0.4	100	248	80.9	3.3	15.1	0.7	100	1,355
マルカ	50.7	8.5	39.9	0.9	100	223	71.6	7.0	20.5	0.9	100	1,186
クエスマ	52.1	4.2	41.2	2.5	100	119	81.9	2.7	13.8	1.6	100	675
ジャーミア	30.6	20.4	47.6	1.4	100	147	54.5	16.1	26.3	3.1	100	816
ワディ・シール	66.2	5.6	27.5	0.7	100	142	79.4	2.6	15.7	2.3	100	778
サハーブ	73.5	7.4	19.1	0.0	100	68	88.7	5.3	5.8	0.2	100	417
ナウール	87.7	2.5	8.6	1.2	100	81	93.0	2.5	4.3	0.2	100	489
ムワッカル	87.4	9.2	2.3	1.2	100	87	93.0	4.7	1.2	1.2	100	602
ジーザ	67.1	7.6	25.3	0.0	100	79	82.5	7.8	9.7	0.0	100	513
計	58.7	8.1	32.2	0.9	100	1,194	78.6	5.8	14.3	1.2	100	6,831

(出所)アンマン世帯調査のデータ

図表 13 世帯主の父親と母親の出身地(単位:%)

	世帯主の父親の出身地						世帯主の母親の出身地					
	アンマン内	ヨルダン内	ヨルダン外	わからない	計	人数	アンマン内	ヨルダン内	ヨルダン外	わからない	計	人数
カサバ・アンマン	23.0	13.1	63.9	0.0	100	61	16.8	10.9	72.3	0.0	100	101
マルカ	22.4	19.0	58.6	0.0	100	58	18.6	11.9	69.5	0.0	100	118
クエスマ	25.6	10.3	64.1	0.0	100	39	23.4	4.7	71.9	0.0	100	64
ジャーミア	21.3	23.4	53.2	2.1	100	47	16.0	20.0	64.0	0.0	100	75
ワディ・シール	55.1	8.2	36.7	0.0	100	49	47.6	6.3	46.0	0.0	100	63
サハーブ	57.1	7.1	35.7	0.0	100	14	56.0	0.0	44.0	0.0	100	25
ナウール	76.9	3.8	15.4	3.8	100	26	81.4	7.0	11.6	0.0	100	43
ムワッカル	88.2	2.9	8.8	0.0	100	34	84.4	8.9	6.7	0.0	100	45
ジーザ	70.0	5.0	25.0	0.0	100	20	62.2	5.4	32.4	0.0	100	37
計	42.0	12.1	45.4	0.6	100	348	36.1	9.8	54.1	0.0	100	571

(出所)アンマン世帯調査のデータ

図表 14 住宅の種類・所有形態(単位:%)

	住宅の種類					住宅の所有形態					
	ヴィラ	ダール	アパート	計	世帯数	持家	借家	給与住宅	無償提供	計	世帯数
カサバ・アンマン	0.4	12.5	87.1	100	248	51.2	36.7	0.0	12.1	100	248
マルカ	0.0	9.9	90.1	100	223	70.0	25.1	0.0	4.9	100	223
クエスマ	0.0	8.4	91.6	100	119	58.0	37.8	0.0	4.2	100	119
ジャーミア	5.4	6.1	88.4	100	147	58.5	32.0	1.4	8.2	100	147
ワディ・シール	3.5	18.3	78.2	100	142	59.9	18.3	0.7	21.1	100	142
サハーブ	2.9	19.1	77.9	100	68	70.6	19.1	0.0	10.3	100	68
ナウール	0.0	53.1	46.9	100	81	74.1	2.5	0.0	23.5	100	81
ムワッカル	1.1	73.6	25.3	100	87	85.1	4.6	0.0	10.3	100	87
ジーザ	0.0	72.2	27.8	100	79	89.9	2.5	0.0	7.6	100	79
計	1.4	23.0	75.5	100	1,194	65.0	24.0	0.3	10.8	100	1,194

(出所)アンマン世帯調査のデータ

図表 15 住宅形態別住民の基本属性

住宅形態別の年齢

	20 代	30 代	40 代	50 代	60 代	70 代以上	計	世帯数	平均年齢
ヴィラ	0.0	11.8	23.5	29.4	29.4	5.9	100	17	54.6
ダール	4.0	19.3	27.3	21.5	16.0	12.0	100	275	51.2
アパート	6.2	24.3	21.4	19.0	18.5	10.6	100	902	49.9
計	5.6	23.0	22.8	19.7	18.1	10.9	100	1194	50.3

住居形態別の世帯規模

	1-2 人	3-4 人	5-6 人	7-8 人	9 人以上	計	世帯数	平均規模
ヴィラ	0.0	17.7	23.5	41.2	17.7	100	17	6.6
ダール	7.6	16.7	27.6	27.6	20.4	100	275	6.4
アパート	9.5	24.5	34.0	22.5	9.4	100	902	5.5
計	9.0	22.6	32.4	24.0	12.1	100	1194	5.7

	住宅形態別の性別		住宅形態別の出身地					
	男性	女性	アンマン	ヨルダン内	アラブ諸国	その他の国	計	世帯数
ヴィラ	82.4	17.7	41.2	35.3	23.5	0.0	100	17
ダール	88.4	11.6	75.3	6.9	17.5	0.4	100	275
アパート	88.0	12.0	54.0	8.0	36.9	1.1	100	902
計	88.0	12.0	58.7	8.1	32.2	0.9	100	1,194

住居形態別の婚姻状態

	未婚	既婚	離婚	配偶者と死別	計	世帯数
ヴィラ	0.0	82.4	5.9	11.8	100	17
ダール	1.8	87.3	0.4	10.6	100	275
アパート	1.3	87.4	0.7	10.6	100	902
計	1.4	87.3	0.7	10.6	100	1,194

住宅形態別の配偶者との婚姻関係

	父方のいとこ	母方のいとこ	父方の親族	母方の親族	同じ地域から	血縁なし	計	世帯数
ヴィラ	11.8	5.9	5.9	17.7	0.0	58.8	100	17
ダール	18.5	7.4	11.9	5.9	7.4	48.9	100	270
アパート	13.8	9.7	11.0	5.8	5.7	53.9	100	890
計	14.9	9.1	11.1	6.0	6.0	52.9	100	1,177

(出所)アンマン世帯調査のデータ

図表 16 住宅形態ごとの住民の社会経済的属性

住宅形態別の教育水準

	非識字	読み書きのみ	小中卒	高卒	大卒以上	計	世帯数
ヴィラ	5.9	0.0	17.7	11.8	64.7	100	17
ダール	18.6	12.4	43.6	11.3	14.2	100	275
アパート	8.5	7.9	46.1	14.4	23.1	100	902
計	10.8	8.8	45.1	13.7	21.6	100	1,194

就業構造

	第 1 次産業	第 2 次産業		第 3 次産業						計	世帯数
	農林業・漁業	鉱業、建築業	製造業	卸小売・修理業	運輸・倉庫・通信業	一般行政・防衛	教育	コミュニティ・社会・個人サービス	その他第 3 次産業		
ヴィラ	0.0	0.0	0.0	7.7	0.0	46.2	15.4	0.0	30.8	100	13
ダール	1.5	4.8	10.6	8.2	11.1	40.1	5.3	8.7	9.7	100	207
アパート	0.1	9.6	16.5	14.9	9.5	17.1	11.4	9.2	11.6	100	696
計	0.4	8.4	15.0	13.3	9.7	22.7	10.0	9.0	11.5	100	916

セクター

	公共部門	民間部門	国際機関	ヨルダン外	計	世帯数
ヴィラ	53.9	30.8	0.0	15.4	100	13
ダール	56.0	43.0	0.5	0.5	100	207
アパート	31.8	60.5	1.9	5.9	100	696
計	37.6	56.1	1.5	4.8	100	916

職業地位

	管理職	専門職	技師、準専門職	事務補助員	サービス・販売従事者	農林漁業従事者	技能工および関連職業の従事者	設備・機械の運転・組立工	単純作業の従事者	計	世帯数
ヴィラ	0.0	46.2	15.4	15.4	7.7	0.0	0.0	0.0	15.4	100	13
ダール	0.5	7.7	8.7	9.7	4.4	1.0	12.1	24.6	31.4	100	207
アパート	0.0	15.8	11.1	7.9	8.3	0.0	24.3	18.8	13.8	100	696
計	0.1	14.4	10.6	8.4	7.4	0.2	21.2	19.9	17.8	100	916

世帯所得

	0JD 以上 3,000JD 未満	3,000JD 以上 4,800JD 未満	4,800JD 以上 7,000JD 未満	7,000JD 以上 10,000JD 未満	10,000JD 以上	計	世帯数	平均所得
ヴィラ	0.0	0.0	17.7	11.8	70.6	100	17	14698.3
ダール	13.5	28.7	21.8	17.5	18.6	100	275	7637.6
アパート	12.2	33.0	22.5	15.9	16.4	100	902	6900.2
計	12.3	31.6	22.3	16.2	17.7	100	1,194	7181.1

(出所)アンマン世帯調査と標本家計調査「世帯の所得と消費調査」のデータ

図表 17 地区の特徴

<table>
<tr><th></th><th>住宅の種類</th><th>世帯規模</th><th>就業構造</th><th>世帯所得</th><th>出生地</th><th>教育水準</th></tr>
<tr><td>カサバ・アンマン</td><td rowspan="5">アパート</td><td rowspan="5">規模(小)</td><td rowspan="5">民間部門</td><td>所得(小)</td><td rowspan="3">アンマン外が多い</td><td>水準(低)</td></tr>
<tr><td>マルカ</td><td rowspan="2">所得(中)</td><td rowspan="4">水準(高)</td></tr>
<tr><td>クエスマ</td></tr>
<tr><td>ジャーミア</td><td rowspan="2">所得(大)</td></tr>
<tr><td>ワディ・シール</td><td rowspan="3">アンマン内が多い</td></tr>
<tr><td>サハーブ</td><td>所得(中)</td></tr>
<tr><td>ナウール</td><td rowspan="3">ダール</td><td rowspan="3">規模(大)</td><td rowspan="3">公共部門</td><td>所得(小)</td><td rowspan="3">水準(低)</td></tr>
<tr><td>ムワッカル</td><td rowspan="2">所得(中)</td></tr>
<tr><td>ジーザ</td></tr>
</table>

(出所)筆者作成